

●授業コード：***** ●教室：*****

●副題： 中学生・高校生のための日本語教育とバイリンガル教育

●講義内容

現在、日本には日本語非母語の児童・生徒が急増しているが、そのような児童・生徒の言語や概念の発達とその支援は専門性の高い分野であるにも関わらず、必要な知識や技術を持つ教員が非常に少ない状況があり、現場での対応は極めて不十分である。本科目では、中高の教員としてそのような生徒に対応するために必要な知識・技術を身につけることを目標とする。文献の講読や教材の分析の発表・ディスカッションのほか、公立中学校などの日本語クラスの見学を行なう。

【目標】 （科目終了時までにはできるようになると期待されること）

(1) 日本語を主言語とする学校において、日本語非母語の児童・生徒に対応するために必要な知識・技術を身につける。

例1：日本語非母語の生徒の言語の習得（維持・摩滅）に影響する要素が理解できる。

例2：日本語非母語の生徒が転入してきたときにすべきことが具体的に理解できる。

例3：日本語非母語の生徒が学習の過程で遭遇する言語・文化の面での困難について推測することができ、進路を考えた上で必要なカリキュラムを作れるようになる。

例4：日本語母語の生徒と非母語の生徒と一緒にしたほうがいい活動とそうでない活動を判断できるようになる。

例5：日本語非母語の生徒のために開発された一般的なカリキュラムや教材・教具がわかるようになり、それらを用いて具体的な学習の支援ができるようになる。

(2) バイリンガル教育や第二言語としての日本語教育といわゆる“国語教育”との共通点・相違点について理解し、“国語教育”において有用な新しい考え方や方法を身につける。（＝主に日本語教育特論Ⅰにおいて扱う）

例6：困難な状況にある子どもの学習について考えることによって言語学習や学習一般に影響する情意的要素について理解し、その視点から従来からある国語教育について批判的考察を加え、具体的な改善策を考えることができる。

例7：“国語教育”の言語的要素とそうでない要素を区別できるようになり、それらが相互にどう関係しているかが説明できるようになる。

例8：“国語教育”の言語面を構成する要素を分析的に考えることができ、そのような観点から“国語のテスト”に批判的考察を加え、改善することができる。例えば、話しことばの教育について考え直すことができる。

(3) 上記2点を通して、多文化教育や多言語社会の視点を学校文化・学校システムや一般社会に反映させるために必要な行動について具体的に考えられるようになる。

例9：マイノリティが一般的に持っている背景やマイノリティにもマジョリティ同様に保証されるべき権利について論理的に考えることができ、現実とのギャップを認識することができる。

例10：マジョリティとマイノリティを同一の原理で扱うという考え方を理解し、それを教育カリキュラム、特に言語やコミュニケーションの学習に反映させることができる。

- (4) 成人対象の第二言語としての日本語教育についての基礎的な知識・技術を身につけ、年少者対象の日本語教育・バイリンガル教育との共通点・相違点を理解する。

●授業計画

【理論編】

1. バイリンガリズムの基礎知識
 2. 先行研究を読む（夏休みの課題レポートを含む）
- * 論文または本の一章を、一つまたは複数、取り上げる
 - * 特定の探求課題を明示して取り組む
 - * ケーススタディも含めてよい

以下の内容を含めたハンドアウトを作成する（A4で1～4ページ）

発表タイトル（文献名）、発表日、発表者氏名、概要、明らかになっていること、不明点・疑問点、総評その他のコメント、（報告する文献）参照文献

- * 発表当日の10:30までに14号館4階の講師室、松下まで提出

探求課題例

【理論編】（ケーススタディも含む）

年少者が複数のことばを学ぶことの利点と問題点は何か。それらは歴史的にどのように変わってきているか。

年少者が二つ目の言語の学習に取り組む際の動機付けに大きく影響する要素には何があるか。

年少者が一度覚えた言語を忘れるのはどのような場合か。

年少者が複数のことばを忘れないで維持するためにはどのようなことが必要とされるか。

年少者はどのように複数のことばをスイッチしているか。

年少者がそのことばを使いたいと思う場合とそうでない場合はどのように異なるか。

日本語非母語の年少者が日本の学校に転入してきたときに、すべきことは何か。順を追って具体的に考えてみよう。

課外補習や入り込みなどはどの段階まで続けることが必要か。

取り出した児童・生徒をメインストリームに戻すタイミングはどのようにして決めたらよいか。

年少者の複数の言語の能力を評価する観点には何があり、具体的にどのような方法があるか。

- * 上述のすべての点について、年齢による相違がどのようにになっているかを考えること。

【実践編】

3. 日本語母語話者対象の通常の教科書・副教材の分析

- * 日本語非母語、バイリンガルの年少者や帰国児童・生徒にとっての困難点を予測する。

4. 非日本語母語の年少者対象の既存教材の分析

5. （可能ならば）見学・サポート実習

- * 今後、見学やサポート実習が可能なところを探す。

【政策・カリキュラム編】

6. 日本語非母語の年少者への対応を現実的に考えた場合、今後、日本の初等・中等教育段階において、

どのような政策が必要かを考える。(多文化教育の先進地の先行研究を知ることを含む。)

* 先進事例としてカナダ、オーストラリア、アメリカ、イギリス、ドイツなどの例を参照し、日本の現実を考慮に入れた上で、可能な政策提言および自分にできることは何かをまとめて、可能な限り実行する。

7. 「国語教育」を見直す。

* 現在の日本の学校教育で行なわれている国語教育をどのようにとらえ直すか。日本語非母語の子どもがいない場合といる場合を、それぞれ検討し、根拠も含めて具体的提言をまとめる。政策面に触れてもよいし、具体的な方法論についてでもよい。

例：言語教育の目標をどこに置くか、4技能のバランスはどうあるべきか、古典の扱い方はどうあるべきか、会話・作文・聴解をどう扱うか、読解や聴解の素材の中にある社会文化知識をどう扱うか、国語以外の教科と言語学習をどう関連付け、国語はどこにどう関わるべきか、総合学習と国語はどう関係しているか、国語の評価はどのように行なうべきかなど。

【授業日程】 * 個人 web 上で公開するに当たり、実際に行なわれた授業をもとに一部書き直してあります

4/13	ガイダンス、ニーズ・レディネス調査	10/26	児島 2001
4/20	バイリンガル教育の基本概念 (1)	(11/2	体育祭のため休講)
4/27	バイリンガル教育の基本概念 (2)	11/6	葛西中小川郁子先生の講義
5/11	バイリンガル教育の基本概念 (3)	11/9	J S L 算数、J S L 社会
5/18	バイリンガル教育の基本概念 (4)	11/16	J S L 国語、J S L 理科、リライト
5/25	(麻疹のため休校)		教材
6/1	中島 2001、第 1 章	11/30	葛西中訪問
6/8	中島 2001、第 2 章	12/7	「マリアとケンのにほんご」
6/15	第 3 章、第 7 章	12/14	東京中華学校訪問
6/22	中島 2001、第 5 章	12/21	⇒11/6 葛西中小川先生の講義の振り替え休講
6/29	イマージョンのビデオ		
7/6	IWC 訪問準備	1/11	国語教育を考え直す
7/13	品川区 IWC 訪問	1/18	カリキュラム・政策を考える
7/20	小林 2001	1/25	受け入れ時にすべきこと、まとめ
7/27	(7/13 に振り替え)		
10/5	佐藤 2001、正高 1993		* オプション：民族学校・インター校・大久保小の訪問
10/12	植松 2006、太田 2000		
10/19	塘 1999、一二三 1996		

● 評価方法

A+ (90~100 点)：この科目の目標をほぼ達成し、授業への参加態度も優れている。

A (80~89 点)：この科目で重要な目標は達成し、授業への参加態度もおおむね積極的である。

B (70~79 点)：この科目の目標の達成は不十分だが、授業への参加は一定レベルに到達し、今後の努力によって向上が期待できる。

C (60~69 点)：この科目の目標の達成は不十分で、参加の程度も不十分だが、合格最低の基準に到達している。今後、多くの努力が必要である。

F (0~59 点)：不合格

★ 教員がこのシラバスの通りに適切に科目運営を行い、受講生が意欲的に授業に参加し、示された

とおりに要求課題を行えば、上述の課題は達成される。したがって、受講に際しては、目標に同意すること、課題遂行について責任を持つことが必要である。

【評価の割合】

授業時の発言や発表（出欠を含む） 30%

出欠 10%

発表内容（各回をA～C（3～1点）で評価） 10%

授業時の発言などのクラスへの積極的な貢献（教員による各学期末の印象） 10%

レポート 70%

第1回（締め切り：夏休み後） 35%

第2回（締め切り：学期末） 35%

*ただし、見学・実習が可能な場合は、その教案を含むレポートを20%とし、他のレポートの割合を各25%とする。

【評価の主要な観点】

- ・第二言語教育・日本語教育に関する基礎的な知識・技能
- ・第二言語教育・日本語教育の研究における着眼・検証のための構想力、論理性 など

●テキスト

当分の間は使用しないが、必要に応じて自分で探した文献や示された参考文献を読むことが必要である。

●参考書

各回の参考資料は第2回または第3回において提示する予定の「授業計画」を参照してください。その他の文献については、別途、文献リストを配付します。

●キーワード 第二言語、日本語、学習、習得、教育 …

●備考

【教員との連絡方法】 Eメール: *****

【授業の進めかた】

各回の探求課題（「授業計画」参照）について、分担して文献を調べて、考えをまとめて授業に臨むことを課題にする。後半では具体的なケースの学習、可能ならば見学やサポートの実習を行なう。教材分析や授業時の発言や発表と、レポートにより、最終評価を行なう。なお、Yahoo Group によるメールグループを作成し、そこを通じて授業に関連する情報や連絡を流すので、原則として参加すること。